

森岡清美著

## 『新版 真宗教団と「家」制度』

法藏館、2018年12月刊、A5判、736頁、17,000円＋税

大場あや\*

## 1. 本書の構成と概要

本書は、真宗教団の構造的特質を社会学の立場から解明したものである。日本の社会学において豊富な蓄積を誇る「家」および同族団研究の成果を基盤に、精緻な実態調査と周到な文献調査から教団組織の分析が展開される。

本書が初めて世に出たのは1962年のことだが、1978年に20頁超の補註が付された増補版（ともに創文社）が刊行され、そこにさらに追補が加えられたのがこの『新版』である。

本書は、全8章から構成されている。1章では、真宗の特色である住職の世襲制に着目し、研究方針が提示される。すなわち寺院を〈住職家を中核とする檀家（門徒）群の家連合〉、教団を〈本山住職家を棟梁とする譜代の主従的家連合〉と理解し、住職家－門徒家の寺檀関係、および本山住職家－末寺住職家の本末関係という教団を支える2つの柱を「家」関係として分析するというものである。続く2・3章では真宗寺院の数と分布が各派別に確認され、門徒の生活様式と社会的性格、地域門徒団の活動および村落構造との関連が論じられる。

以上の寺院と門徒（団）の分析をもとに、4章以降では、（1）寺院－門徒間、（2）寺院相互間（末寺相互間、本山－末寺間）の関係が解明される。4章では寺門徒団に注目して寺檀関係が描かれ、5章では末寺相互の組寺関係について、①独立身分、②旧従属身分、③従属身分の差異が析出される。そこから、同じ身分相互の組結合、経営協同を伴う①・③間の主従結合、経営協同は伴わないが政治的に庇護従属する①・②および①・③間の与力結合の3類型が提示される。6章では、より詳細な事例研究として、本坊を中心に構成される合力組織の検討

から本坊・寺中下道場の主従関係が活写される。7章では近世の本末制度の確立と、明治期以降の諸改革による本末関係の変化が論じられ、政治体制と教団組織の関係が焦点化される。8章に至り、真宗教団さらには真宗教義と「家」制度の関係が考究される。

## 2. 本書の知見と今後の課題

本書の功績はすでに多くの研究領域で評されてきた通りである。評者なりの観点から本書の核心と思われるのは、5・6章で明らかにされた本坊・寺中下道場の主従関係、および本坊の経営に対する寺中と下道場の関与・従属の差に、教団構造における本末関係の原型を見出している点である。「本坊寺中関係の如きは教団の一小部分における現象にすぎないが」、本坊を頂点とするピラミッドとそれを包括する本山のピラミッドの間には構造的に一貫するものがあり、「教団構成を理解する鍵がここに潜んでいる」。

また、著者は「新版あとがき」において、本書の学界へのメッセージの1つは、有賀喜左衛門による家連合の2類型（同族と組）に対し、寺連合の3類型（主従結合・与力結合・組結合）を措定したことだと述べる。この与力結合について、農村社会学や地域社会学の成果に目を転じると、「シンルイ」や「トナリ関係」（竹内利美）、大和高原村落の民俗慣行「与力制度」[三上・山本1985]など、主従結合ないし組結合では捉えきれない多様な「家」関係の事例が報告されている。今後これらの研究と比較検討することで、著者の「メッセージ」が継承され、議論が深化・進展することが期待される。

## 参考文献

- 三上勝也・山本剛郎1985『与力制度と村落構造』多賀出版。  
 西山茂2020「『与力関係』の射程とその限界」『東洋学研究』57：289-300。

\* 大正大学非常勤講師